北会津村の歴史
（歴史民俗資料館「歴史コーナー」の解説）

小森五良

北会津村にも小規模ながら歴史民俗資料館が設置された。本稿は歴史民俗資料館の歴史コーナーの解説であり、古代・中世・近世と展示の順序に従って述べたものである。

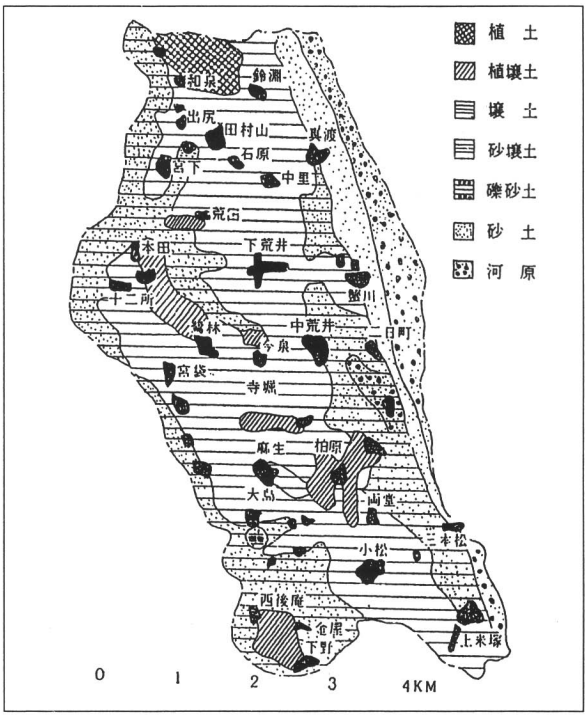
古代（縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代）

一　北会津村の誕生

昔、北会津村は洪水の常習地帯といわれている地域で誕生した。即ち大川（阿賀川）は会津本郷町の東端、岩崎山の急な崖を頂点として、会津盆地の南半分に大きな扇状地をつくっている。同じように宮川は、会津高田町の南、高橋の峡谷を頂点として扇状地をつくっており、南の関山方面から流れてきた濁川沿いぬいあわせたようになっており、北会津村は大川と宮川の複合した扇状地の地形をなしている。即ち大川と濁川・宮川・鶴沼川に挟まれた複合扇状地で絶えず洪水が氾濫したことにより、その上に中州が形成された。

一方、扇状地はその扇項付近から大きく扇形に拡がり、下流にいくほど堆積した砂礫は小さくなっていく。

このように現在の北会津村の占める地域は、大川や宮川などの氾濫によって流された土砂の堆積により地層ができたため、砂壌土が多い割に土地は肥沃のところが多い。そのため比較的高い中州などには相当早くから人々が住み着き、集落ができたものと思われる。そして各地にできた集落の集合体が、現在の北会津村である。

なお、明治三十五年農商務省の地質調査によれば、北会津村の土壌は左図のとおりである。

会津村土性図（明治35年農商務省地質調査所による）